

# ウェスレーの経済神学と財観の発展 —初期から中期の社会的活動の変遷に着目して—

清水 俊毅

## I. はじめに

本論では、ジョン・ウェスレーの神学的な経済倫理、人間と財の関わり方の倫理を検証する。論者はこれを経済神学と仮称しているが、それが彼の人生の中でどう形成されていったか、彼のテキストに沿いながら具体的に見ていきたい。本小論で彼の全生涯を追うことは不可能なので、ここではその一局面、彼が如何にして金銭に神意を見るようになったかに焦点を当てることとする。それに当たって、まずはこの「神学的な経済倫理」をどのような枠組みで見ているかについて触れておきたい。

かつて岸田紀氏は、ウェスレーに連なるイングランド国教会高教会派の系譜分析をウェーバー批判という形で大きなコンテクストにつなげた<sup>1</sup>。ウェスレーにおける国教会系譜研究として白眉だったと認識しているが、論者の注意を引いたのは、その批判がウェスレー個人研究に基づくウェーバーの論点批判として以上に、どのように機能しているか、ということであった。かの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』で述べられた、召命労働を救済と直結させる「労働の倫理」に対し、岸田はローマカトリック以来の愛徳／慈善を救済に直結させる「慈善の倫理」を対置した。ウェーバーはウェスレーを前者の代表例に仕立てたが、岸田は彼が後者に連なると言う。だがウェーバーが述べた共通点をただ無視することもできない。かの「三つの簡明な規則」にあるように、ウェスレーが世俗内労働を通じて可能な限り財を得るよう勧告している

---

<sup>1</sup> 岸田紀『ジョン・ウェズリ研究』ミネルヴァ書房、1977年。

のも確かなのである。

両「倫理」は救済論における「財の獲得の倫理」「財の使用の倫理」と読み替え、概念的に結合することができる。ウェーバーの「倫理」において、宗教的な財の使用法はあまり語られない。宗教的な世俗労働によって宗教的に世俗財が獲得された後、世俗的な使用には向けられないので結果的に富として蓄積されてしまう。そのため宗教的な世俗労働のために投じる——この消極的な再投資・拡大再生産が宗教的使用法に当たろう。だが岸田の批判が示唆するように、己の財を隣人や弱者への愛徳／慈善に用いることは、伝統的に重要な宗教的使用法であり救済の指標であった。形や積極性の濃淡は異なれ、カルヴァン主義者らもこれに無縁ではない。つまり、ウェーバーに対して岸田は、財の「使用」段階における見地の不足を補正したのだ。私見では、ウェスレーはただの「慈善の倫理」の末裔ではなく、労働／財の獲得の倫理とこれが歴史的に結合する様を、西方キリスト教史において象徴する人物となる。

論者は両「倫理」を結合した枠組みを基礎付けるため、歴史的結合のメルクマールと目すウェスレーの研究を行なっている。彼の神学については（清水光雄氏が近年よく紹介なさってきたが<sup>2)</sup>）その生涯に及ぶ包括的研究が進んできたとは言え、この経済倫理的領域には包括的探査の手は及んでいなかった<sup>3)</sup>。そこで論者は、主としてウェスレーの説教集と日誌<sup>4)</sup>を時系列的に通覧し、関連する言説を集成し、そこから上述の枠組みを整理し、時期毎の相互比較が可能になるよう努めた。これは他者との歴史的比較を行う準備となり、このような比較の基準を作ることで、地域・社会毎の比較をも行えるようになり、現代の社会状況の分析にも資すると考える。

---

<sup>2)</sup> 特に、清水光雄『ウェスレーの救済論 ——西方と東方キリスト教思想の融合』教文館、2002年。

<sup>3)</sup> 比較的まとまったものとして、Manfred Marquardt, (1976), trans. by Steely & Gunter, *John Wesley's Social Ethics: Praxis and Principles*, (Abingdon Press, 1992 / Wipf and Stock, 2000).

<sup>4)</sup> 説教は200周年版全集を、日誌はカーノック版を使用し、以下それぞれ Works X: YY, Journal X: YY と表示する (X は巻数、Y は頁数)。Albert C. Outler, ed., *The Works of John Wesley: Vol. 1-4*, (Abingdon Press, 1984-1987). Nehemia Curnock, *The Journal of the Rev. John Wesley: Vol. 1-8*, (R. Culley, 1909-1916).

だが、思想は理念的な枠に整理されたものとしてのみならず、常に人と社会との関わりの中でも捉えねば、社会への影響など分析することはできず、現実と乖離するであろう。そうした意味で、ウェスレーの生涯を追うことは論者の研究の重大な基盤となっている。本小論ではまず、上述の思想的枠組みの構築について述べた後に、実際のテキストからそれに整理・抽出する。そしてその後、彼の生涯における重大な変化点である、財その物への評価が変遷する過程を彼のテキストから検証し、示す<sup>5</sup>。

## II. 神学的経済倫理の枠組み

論者が経済神学と仮称している枠組みを構成する際、範となる型を求めた先がウェスレーの「三つの簡明な規則」である。「Gain all you can, Save all you can, Give all you can.」、「可能な限り得て、可能な限り救い（節約し／蓄え）、可能な限り与えよ」などと訳することができる。これはさらに、「稼ぎの最大化に努め、私的な消費を最小化し、差額としての慈善を最大化せよ」と言い換えられるだろう。単純に論理として、慈善の規模の増大に先鋭化した、首尾一貫した主張と言える。前章に準じて抽象化すると、三規則はそれぞれ、「財の（宗教的）獲得」「財の（宗教的）保持」「財の（宗教的）使用」に関する主張、と言い換え

---

<sup>5</sup> なお本論中、「金銭」「財」などの語が互換的に用いられることがある。現代人にとってもウェスレーにとっても、最も基礎的な慈善の形式は、金を求める乞食に手ずから金を与えることだろう（現代では救世軍の社会鍋に投じる等の募金行為の方が一般的だろうか）。金銭は今の慈善において最も代表的・具体的な消費物と言える。だが他者のために移転されているのが金銭のみでないことは自明である。本邦『寄付白書』では、「寄付」を「自分自身や家族のためではなく、募金活動や社会貢献等を行っている人や団体に対して、金銭や金銭以外の物品（衣料品、食料品、医療品、日用品、クレジットカードのポイント、不動産など）を自発的に提供する行為」と定義している。だが移転されるものは物品にも限られない。社会鍋や募金箱を手街頭に立つ者は、時間という資源を他者のため費やしている筈だ。慈善において他者に移転されているもの一般を包含する抽象概念、これを「資源」などと呼ぶとあまりにも分かりにくくなるので、具体的に扱いたい事柄に一步近づけて「財」と呼ぶ。ウェスレーは説教『良き家令』で「人間が神から委託されたもの」を詳細に解説しているが、この資源一般を考える参考になる。この抽象性の範囲内での代表事例が「金銭」である。

られよう。このように抽象化することで、三規則は抽出の鍵とすべき論点を分かりやすく提供してくれる。

論者はこの三論点を拡張して五点とし、次のように枠付けた。第一が「①財の獲得への見方」であり、具体的には主に職業観・労働観として抽出する。第二が「②財その物への見方」であり、具体的には主に金銭観として現れるが、金銭のみならずその他の財物一般への見方でもある。そして第三が「③財の保持への見方」であり、主には蓄財観、富者への見方として抽出する。第四は「④財の放棄への見方」であり、財物蔑視・清貧徳への見方などからなる。第五が「⑤財の使用への見方」であり、主に慈善観として抽出する。この五点をもって、人間が如何に財・金銭と関わるべきかという問題への見解を、総合的に捉えることができると考える。もともと、これのみでは半端なこともあるので、その他の神学的な補助・前提論点も随時拾いあげる。これを⑥とする。

ウェスレーの「経済神学」の最終形をあらかじめ一連なりに簡易に示すと<sup>6</sup>、次のようになる。【1：前提⑥】キリスト教徒も異教徒もともに現世的執着／悪の意図から離れ、神への純粹な意図を持った上で、【2：獲得①】人間＝「神の家令職」として、神の召命たる職業労働に可能な限り精勤し、【3：財自体②】神の依託物、殊に最も強力な道具たる金銭を可能な限り獲得し、【4：保持・放棄③④】浪費・虚飾・死蔵、並びに放棄といった、金銭を扱う際の危険性を可能な限り避け、【5：使用⑤】自らと家人と世俗的事業の必要分を越えた余剰財は他者の必要分のため可能な限り与えるべし。【6：総括⑥】以上が人間の本質的任務である。内的な信仰を外的な業として表すことで自他ともに一丸となって奮起すべし。任務の正しい遂行を審判の日に報告できたならば、天国に受け入れられ、永遠に報いられる。

着手時には、オルダスゲイト回心体験を巡る論争を念頭に主に生涯的变化に注目したが、むしろ非常に高い継続性を看取できた。主要な要素・枠組みは初期（1733-1738）、それも渡米伝道までの時点で既にほとんど出揃い、生涯一貫する。善き業、殊に慈善を行うことの神的価値は、ウェスレーにとって支柱の

---

<sup>6</sup> 別稿で多少詳細なまとめを示した。清水俊毅「ジョン・ウェスレーの経済神学 ―その内的変遷と集成」『東京大学宗教学年報』31号（2014）、177-198頁。

一つであった。だが変化がないわけでは当然ない。以下において、本小論はその顕著な一面を示すであろう。

### Ⅲ. 中期説教『金銭の使用法』における神学的経済倫理

中期説教『金銭の使用法 (The Use Of Money)』(以下『使用法』)<sup>7</sup>は「三規則」を主張し、「標準説教集」に含まれ、ウェスレーの経済的倫理を代表する説教である。当人による説教集 1760 年刊第四篇に収録されており、アウトラーは 200 周年記念ウェスレー全集(以下『全集』)での時系列整理で、本説教に同年の年号を付している。だが彼が同説教の冒頭解説で述べたように、ウェスレーが同じ主題聖句ルカ 16:9 について幾度も説教したことが日誌等から分かる。アウトラーと別途に時系列整理を試みたスミス<sup>8</sup>は、この説教の成立に 1744 年 2 月 17 日という日付を付したが、同日のウェスレーの日誌にはこうある<sup>9</sup>。

「我々は、十七日の金曜日を、厳粛なる断食と祈りの日として守った。午後、多数の人々が会合したので、私は彼らに、機会のある内に自分のために『不正の富による友』を作ること、飢えたる者に自分のパンを与え、裸の者に着物を着せてやり、そして彼ら自身の同族を見て見ぬふりせぬよう勧めた。そして神が彼らの心をお開きになったので、50ポンド近くが寄付に提供された。私はすぐにそれを、勤勉であり未だ必需品を要していると分かっている人々のために下着や毛の着物、靴を買うのに使った。」

当時、50ポンドあれば地方に邸宅を建てることができた。同記事の説教が説教集版とどの程度違わぬかはとかく、当該聖句(「不正の富による友」)を説くウェスレーは会衆になかなかの感化を与えたようだ。

#### ・『使用法』概要

<sup>7</sup> Works 2: 263-280

<sup>8</sup> Timothy Smith, "A Chronological List of Wesley's Sermons and Doctrinal Essays", *Wesleyan Theological Journal*, Vol.17-2 (1982), pp. 88-110.

<sup>9</sup> Journal 3: 116-117

さてウェスレーは『使用法』において、まず主題聖句「そこで、わたしはあなたに言いますが、不正の富で、自分のために友をつくりなさい。そうしておけば、富がなくなったとき、彼らはあなたがたを、永遠の住まいに迎えるのです」(ルカ 16:9) について語る。不正な家令がその浪費を主人に察知され、最終会計報告を要求された時に、解雇され最早家令をしていられなくなった後に自らを喜んで迎え入れてくれる人を作ろうと、借財のある人を集めて主人への借金の証文から数字を減らした。この抜け目のなさを主人が褒めた——というくだりである。「光の子ら」もこの「この世の子ら」の抜け目のなさを見習わなければならない。

そして彼は語り出す。当然この主人に当たるのは神であり、この家令が説教を受ける一人一人、人間に当たる。序章で明瞭に語られているわけではないが、最早家令をしていられなくなる時とは死す時であり、人間は最後の審判で会計報告の提出を要求される。だから死ぬまでに、不正な富を用いてでも、主人に褒められ天に迎え入れられるための利口な予備策を講じておかなければならない。序章の段階でこう概括されるが、人間が如何に家令であるのかはこの段階では語られない。明らかになるのは、三規則つまり「可能な限り得て、可能な限り救い、可能な限り施せ」の三つ目に達する、第三章二節以降である。そこに曰く、万物の所有者は神であり、人はその一切に所有権を持たない。人の魂から、才能、身体、いわゆる世俗的な財に至るまですべてが、あくまでも所有者たる神により委託された財産である。家令としてその管理を任されているのが人であり、そしてその適切な管理方法は神によって啓示されている、とされる。だが序章では、人間が用いる富が「不正な富」であるのは、その獲得の手段がしばしば不正であり、公正に獲得された場合でも用いられ方は一般に不正だから、と語られるに留まる。

序章では続けて、金銭が如何に重要であり、神の委託物を象徴するものであるかが述べられる。曰く、主題聖句にキリスト教の知恵の優れた一部門としての金銭の使用法が説かれている。ほとんどあらゆる時代・場所で金銭は悪の根源として罵られてきたが、金銭自体に悪はない。悪しく用いられない可能性のないものは存在しない。金銭は最悪の使用にも最善の使用にも完全に適用できる最優の道具にして、あらゆる種の善を為すための最も簡明な道具、神の恵み

深き摂理と知恵による卓越した贈り物である。ただし、キリスト教の知恵と最も高貴な目的に沿うように使われるべきで、神を畏れる者はこの優れたタラント／金銭の用法を理解し守ることで、「不正な富」の誠実な家令であることを証明しなければならない。この使用法は三つの規則にまとめられ、三つを正確に守ることでそれを証明できる。

その第一は「可能な限り得よ」である。可能な限りとはどういうことか。外的条件として、自らの身心、また隣人や共同体を損なってはならない。常時窮屈な姿勢を強いられる仕事（身体を傷付ける）、詐術を必然的に伴う仕事（心を傷付ける）は禁じられるし、酒を無差別に売ような仕事は他者と共同体を地獄に駆り立てるので呪われており、居酒屋・劇場などの大衆娯楽も人を罪へ追う。商品を市場価格以下で売って隣人の商売を没落させる、ダンピングも禁じられる。なお己の魂を傷付ける可能性については特に個人差があるだろうので、各人が自らのために判断しなければならないとされる。自由意志と理性によって禁にならぬ仕事を選択する必要があるのだ。このような戒めの後、内的条件が述べられる。自らの召命において（in your calling）可能な限りの正直な勤勉さを費やし、得るのである。己の特殊召命（your particular calling）において、神からの委託されたものを最大限に活用する義務がある。例えば時間であり、これを最大限活用するなら無益な娯楽に費やす時間は残らない筈である。また例えば自分の能力であり、神の与えた理解力をすべて働かせ、手にした仕事がなんであれ、改善していけないのはキリスト者の恥と述べられる。

第二は「可能な限り救え（save）」である。あるいは、可能な限り「貯蓄せよ／節約せよ」であるが、いずれにせよ、第二章の冒頭でこの指示にすぐ続けて「大切なタラントを海に／無益な出費に投げ捨てるな」とあるように、この指示を日本語に直接写し取るならば「（空費から）救え」であろう。第二章で語られていることはもっぱら空費浪費の戒めであって、蓄積の評価・奨励は説かれない。あくまでも結果的に貯蓄になるのだ<sup>10</sup>。さて、空費とは何か。まず、文字通りに「海に投げ捨てること」がその例である。本説教では、ウェスレーはこういった単に捨てる行為を序章二節で言及したホラティウスら「異教の哲学

<sup>10</sup> save の訳出検討については、前掲拙稿 188 頁も参照。

者たち」に帰し、「これには何か確固たる理由があるのか。何もない」と切って捨てる。ただし第二章五節で、虚栄に空費するよりは「まだ有害でない愚かさ」と格付けされている。なお哲学者らに触れた節の直前で、「神に選ばれた人々」は「一般的に、この（金銭の使用法という）主題の重要性が要求するようにはこの優れたタラントの使い方を考慮しない」と彼は述べるが、初代教会以来の自発的に財を放棄する修道士たちを射程に収めているのだろう。金銭を自発的に放棄することの次の空費例は、「肉の欲」を満足させる消費である。多飲暴食などは言うまでもなく、「優雅なる美食」等も切り捨て、「飾り気なき自然本性の要求」で満足するよう彼は勧告する。また服や装身具、家具や庭園といった「目の欲」「生活上の自尊心」を満たすための浪費も戒める。

そして第三規則であるが、ウェスレーはまず、第一、第二の規則を遂行した時点で止まっては、すべては無意味だと勧告する。金庫や銀行にしまいこむのは地中に埋めるも同然、金銭を使わないことは実質的に捨てることである。第一の規則を通じて得られ、第二の規則を通じて空費から救われ一時的に蓄積された金銭は、第三の規則「可能なかぎり施せ」をもって、はじめて神意に適う「使い方」として完結するのだ。彼は財産の使用法の包括的な手順をこう述べる。第一の手順で得られた、即ち神が委ねた財から、まず自身のために必要な分を取り、次に家中の必要に宛てる。そして残りがあれば「信仰の家族の人たちに善を行ないましょう」。さらに余剰があれば「機会のあるたびに、すべての人に対して善を行ないましょう」。彼は、このような仕方の消費されたもの、つまり必要に準じて分配された神の所有物は、ことごとく「神のものは神に返し」たことになると述べ、「こうして神に受け入れられる、軽い容易な奉仕に対し、神は栄光の内なる永遠の重みでもって報いることを約束した」とまとめる。

そしてウェスレーは最終節で、このように財（即ち神の所有物）が処理されなかつたら人は忠実な家令ではありえず、これを「義人の知恵」において小さからぬ部分だと述べ、また「まさに今日と呼ばれているこの日から、神の声に聞き従いなさい！」「あなたの召命の尊厳に適うよう振る舞いなさい！（act up to the dignity of your calling!）」と強く勧告する。以上が本説教の概要である。

## ・『使用法』の模式化とまとめ

ここで同説教から、前章に掲げた各論点に応じて、ウェスレーの財をめぐる諸要素の見方を整理する。

- ①職業観であるが、ウェスレーは万民を「神に所有物を委託された家令」と定義する。人間の生は家令職の仕事、死は職務終了、死後の審判は会計報告の提出・審査の時である。この仕事ぶりを通して、死後に忠実な家令であったか不実な家令であったかが問われる。加えてウェスレーは、職業に当たる意味合いで召命／特殊召命という言葉を使用しており、神が各人に与えた能力の相応しい発揮の仕方としての個別の世俗の仕事、という発想を有している。各人の判断力でそれを適切に選ぶことを重要とし、職業自体が社会のアプリオリな構成要素とはしない（身分職掌が固定的でない）。個別の職に対する神の家令職が、この特殊召命に対する一般召命（general calling）と表現することもできよう。この召命に相応しく、神と共同体と自らへの誠実さの範囲内で能力の限りを尽くして労働することが、神慮に適合するあり方である。
- ②労働によって得られる財、それを代表する金銭そのものへの見方はどうか。本説教で、金銭は抜きん出て優れた道具、神の賜物で、その委託物でも主たるものと見做されている。それ自体は中立であり悪ではなく、善の目的に大いなる便益となる。道具としての使用目的は啓示によって明らかにされているので、神慮に合った相応しい使い方が期待される、とされる。
- ③財の蓄積、財を貯めることへの見方はどうか。まず富貴・奢侈として変換される財は、不義たる空費と非難される。ウェスレーにとって金銭という道具は使われなくては無意味であり、銀行や金庫に溜め込むといった貯蓄行為は実効として放棄同然と非難される。
- ④財を放棄すること自体への見方はどうか。これは、虚栄を満たす空費に比べると有害でないながら、まったくの空虚な行為であると評価される。この世の財は適切に使用するために神から与えられている。放棄してはならない。
- ⑤最後に、財を他者に施すことへの見方であるが、これこそが金銭の「使用法」そのものであり、これがなければ金銭をめぐる一切が無意味であると評価される。正確に述べると、この「与える」対象には自己も含まれ、神の所有物を管理する家令として、まず己の必要を私心なく判断し、己に与える。次に家人の必要、次いで信仰の家族、共同体全体、さらに万人の必要を満たすた

めに、と順に余剰を与えていく。以上の過程に従い、各人が可能な範囲に可能な限り施すことが、死後の家令職会計報告で正しい職務遂行を証明できるように行ないであり、天国に受け入れられる道である。

前章に簡易的にまとめた「最終形」に照らすと、(現世愛から生ずる個別の欲望が常に排除されていることから、容易に読み取れるとはいえ)人間の現世愛という属性への警戒心が明示されず、金銭の危険性はほぼ喚起されない、また他者にも実践を促すための外的行為という行為論が示されていない、等々の差異がある。だが全体としては『金銭の使用法』の時点で既に全体像は定まっていると言える(これらの論点も、同時期のウェスレーが表現していなかったわけではない)。

#### IV. 初期ウェスレーにおける神学的経済倫理

ここで視点を転じ、公的活動最初期のウェスレー言説を見てみたい。

##### ・『告発されし大衆娯楽』

まず取り上げるのは、1732年9月3日にウェスレーが故郷エプワースで説いた『告発されし大衆娯楽(Public Diversions Denounced)』(以下『大衆娯楽』)<sup>11</sup>である。ウェスレーはまず、本説教の主題聖句「町でラッパが鳴ったら、民は驚かないだろうか。町に悪しきことが起これば、それは主が下されるのではないだろうか」(アモス3:6)について語る。悪と呼ばれるものは実体としては存在せず、人間にとって害となる出来事や状況を呼ぶ便宜的な名としてそれはある。実際には全地の王たる神の認可の下に起きているに過ぎない。悪なるもの、中でも頻繁には見られないものは、神が吹きこまれる警告のラッパなのである。神を畏れる民はこれを見て、罪深きを改め、また来たるべき時に備えて勤勉さを総動員し(use their whole diligence)、自らの召命と選びとを確たるものとしよう(make their calling and election sure)と決意する。

---

<sup>11</sup> Works 4: 318-328

続けて、飲酒や競馬といった娯楽<sup>12</sup>を「これがそれ自体罪深いかどうか、わざわざ言うまでもないだろう」と語るウェスレーは、これらは地上的で感覚的で悪魔的な情熱を満たすために悪魔が用いる最上の道具であって、これによって人々は、「神を愛する者よりもむしろ悦楽を愛する者」にされてしまうのだ、と非難する。まず娯楽に欲望を持つ富者に対し、金銭なりを「それについて必要とせず感謝もしないだろう者」にやってしまったと批判する。それによって、本来ならば同じ財を「兄弟たる無力な信徒」に施すことで、キリストその人に施したも同然とキリストに見做され、来世で然るべく取り扱われる筈であったところを、永遠のいのちへの種を放り捨てたのだ、と。そして続いて彼は、同じく娯楽に欲望を持つ貧者に対して、家で待つ家族が待ち望んでいたものでなく無益な娯楽のために金銭なりを放り捨てたと論難する。あるいは当該娯楽に金銭を払っていないにしても、誠実勤勉なる労働に費やすべきであった時間を無駄にしてしまったのだ、と。そしてウェスレーは続けて、富者には「善き業において富むための労働」を行なう然るべき理由があろうと、貧者には家庭をやしなうために働く然るべき理由があろうと、それぞれ勧告する。さらに後者に対して、家族を養ったならば為すべきことはすべて為した、と述べ、それ以降には「あなた方は unnecessary 娯楽のためにでなく、身を覆うための服、生を養うための食、頭を横たえるための家、といった自然の要を残している人に与えるために働くのだ」、と勧告を続けている。

本説教には「自らと家中の自然な必要を満たすための勤勉な労働」と「必要を満たした後の、施しという善き業のための労働」という二重構造が明確に見られ、『使用法』の基礎が既にウェスレーに存在していることが確認される（ただし、こちらでは「為すべきこと」という義務的範疇は前者に留まる）。またウェスレーは上記勧告の後に、老いも若きも、富者も貧者も、誰も彼も揃って労働に励むことで、街と民の過去の不名誉を濯げたと述べる。富者や貧者について、即倫理的な判断をするものでない様子とともに、共同体を倫理的単位とする認識を見て取ることができる（『使用法』は基本的に個人々人への勧告である）。『使

<sup>12</sup> これを指すための言葉 *diversion* は「注意を逸らすもの」が原義であり、単語選びの時点から「本道たる信仰の道に外れている」という非難がこめられている。

用法』での富者は、肉の欲・目の欲・虚栄心を満足させるために金銭を浪費している者に外ならないので、富者への固有の非難がない点——正確に述べるならば、『使用法』第三規則に相当する行為の不履行という批判はあれど、第二規則に基づく富貴自体への非難がなく、貧者にも同じ水準で批判が向かう点において、論点③に異同を有していると言える。(もっとも、娯楽批判の基盤が『使用法』と通底していることは明らかである。)

### ・『善き人の悩みと安らぎ』

次に取り上げるのは、アメリカ行きの船に乗る直前の 1735 年 9 月 21 日に大学付き教会で説教された、『善き人の悩みと安らぎ (The Trouble And Rest Of Good Men)』(以下『善き人』)<sup>13</sup>である。本説教でウェスレーはまず、「信仰においてまだ難破していないのに、信仰の果実を知らぬ者のどれだけ多いことか！」という慨嘆を発する。彼らはまだ「己を愛する者」「この世を愛する者」「悦楽を愛する者」であって、「神を愛する者」でない。「神において喜んでいない」——そして、愛によって働く信仰については何処にあるか、と彼は問いを発する。まず「富者の間にか」とウェスレーは仮の答えを提示するが、「否」とそのまま否定し、「諸々の富の欺瞞性は言葉の首を絞め、言葉は実を結ばないものになる」と説明する。次に彼は「では、貧者の間にか」と述べ、これも同じく「否」と切って捨てる。彼がこれに与える説明は、「この世への心配 (The cares of the world) がそこにある」である。貧しさも「完全にとって何らの実も結ばない」のだ。では貧しさも富も持たない者の間には信仰があるのかと言えば、必要を満たす手段以上のものへの欲求があるので、その程度に応じて心が魂の外へと引き離されてしまう。これが人類にとっての常なる問題である——

本説教におけるウェスレーは、富の悪性は訴えるが、さりとて貧しさを評価することもない。いわゆるカルヴァン主義ピューリタニズムの伝統に沿っているわけでもないが、前宗教改革的な伝統に沿った(清貧に主眼を置く)貧者称揚の言説を為すわけでもない<sup>14</sup>ことが分かる。この富の悪性への非難は、『大衆

---

<sup>13</sup> Works 3: 531-541

<sup>14</sup> 本論の範囲内では他者との異同に注視はしないが、つとに影響が語られるテイラーやローと、ウェスレーはこの点で異なる。彼らは清貧徳を称揚する。

『娯楽』同様に『使用法』の②財観「中立な道具」と対照を見せるようであり、また富貴を問わず人々を批判する点も、③④において異なった貧富観を見せる。また『使用法』に積極的に現れていない論点だが、「この世への心配」（後の説教では「この世への愛」という属性は常に彼の警戒対象となり続ける。この「神を愛する者でなく悦楽を愛する者」という非難が『大衆娯楽』でも語られていたことと、『大衆娯楽』における慈善行為の位置づけを考え合わせるならば、悦楽やそれに消費される金銭といったこの世的なものに対する執着が、信仰並びに信仰に基づく慈善と背反的に位置づけられる構造を看取できるだろう。

### ・非説教資料

ここで日誌を取り上げる。ウェスレー日誌第一部の冒頭、インディアン伝道のため渡米船に乗りこもうという1735年10月14日付けで、ウェスレーは次のようなことを書いている。自分たちが故国を去るのは、この世の欠乏から逃れるためでもなければ、「かの御方が我々をして、糞や滓以上の何かではないと常に見なさしめて下さるだろうと信ずるところの、富や名誉を得るためでもない」<sup>15</sup>、と。この時期の言説上、金銭とその他の奢侈品との間に区別は設けられてはいないし、その内実について殊更の分析もされていない。前段の富の悪性に対する非難を合わせて考えるならば、この時期のウェスレーにこの世の財産への一般的一律的卑賤視があったと考えて過たないだろう。③財観の上で『使用法』と異なることは言うまでもない。

さらに時代を一年近く遡り、1734年12月10日付けでウェスレーが父サミュエルと、同名の兄とに送った手紙に目を向けたい。当時、父サミュエル、そして父の死期を予感していた<sup>16</sup>兄サミュエルは、彼に対して、いい加減大学から離れ、父サミュエルが牧師を務める故郷エプワース教区に赴任して父の後を継

<sup>15</sup> Journal 1: 109

<sup>16</sup> 兄サミュエルとの書簡議論が3月まで続き、4月25日に父サミュエルが亡くなる。当時のウェスレーの脳裡には、ルカ14:26「『わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子になることができません。』」の句が流れていたかもしれない。兄サミュエルも遠からず、1739年に早世する。

げ、母のためにも故郷に落ち着け、と勧告していた<sup>17</sup>。ウェスレーは彼らに対し、自らがオックスフォードにいるべき理由を滔々と述べた手紙を送ったのである。さて父兄はウェスレーに対し、(ホーリークラブ活動のために)オックスフォードで侮り嘲りを受けているのでは、と嫌疑を投げていた。この手紙の第十七節から嫌疑への返答<sup>18</sup>が始まるのだが、その中で彼は次のように語っている——侮り嘲りはキリストが世から受けたことであり、キリストも、己の信奉者はこの世の者でないが故にこの世の者から憎まれるとしていた。神を愛する者は「この世を糞や滓のように見なし、キリストの愛のみを一心に追求します」。だから自分もこの世の者たちと相容れず、憎まれ侮られる……「侮られるまでは、人は救いの状態にあることはできません」「侮りはかの方に従う者皆が背負う十字架の一部であり、かの方の弟子たることを示す記章、かの方に勤めを認められた刻印、かの方の召命の堅固な押印であります」——悩める善き人ウェスレーを取り巻く斯様な状況の中から、渡米伝道が決心され、説教『善き人』が語られ、このような手紙が編まれたわけである。

神を一心に愛し、神(キリスト)の弟子と認められた者は、この世の財産を糞や滓と見なす。このような認識は、『使用法』における「神に選ばれた人々は一般に、金銭という優れた道具の使い方を、然るべき重要度でもって考慮しない」という論述と重なってくる。重なり、その差異を浮かび上がらせる。この当時から『使用法』の頃に至るまでに、金銭といった道具について反省があったということだろう。

以上、財に関する倫理について、全体像においては中期説教『金銭の使用法』とほぼ同じものを1730年代初頭に既に見ることができることは確認した。だが初期と中期の間には、特に②財観において顕著な相違が見て取れるのである<sup>19</sup>。この変化はどのような過程を経て起こったのか。

---

<sup>17</sup> 実際ウェスレーは、1727年等に父の兼務教区で副牧師として働いていた。

<sup>18</sup> Journal 2: 164-165

<sup>19</sup> また富者と貧者に等価的評価がなされており、富者が特殊に批判されており、③での差異と見なせるが、本稿の範囲ではこれ以上詳細には扱わない。

## V. 中期に至るウェスレーの諸経験

この点については、ウェスレーの社会的側面、彼と金銭との具体的な関わり方に着目することで見えてくると考える。

### ・金銭に働く神意の認知

まず日誌から、1739年5月中ほどの出来事を取り上げる<sup>20</sup>。イングランド西南部でウェスレーが説教をしていた時期のこと、彼はプリストルに敷地を手に入れ、同市ニコラス街・ボールドウィン街で結成されていた両会（society）の集会所を建設しようとしていた。これら各地の宗教会はメソジスト会の源流であり、この時の集会所「ニュールーム」は後に、メソジスト会最初の説教所・礼拝堂と見なされるようになる。さてウェスレーは集会所建設に当たり、己が建設過程に関与する必要はなく受託者団に全て任せればいい、と当初思っていたのだが、これが間違いであった。

「しかし私は速やかに思い違いに気付いた。第一は費用の関係である。というのも、事業全体が、私が直ちに職人全員分の支払を引き受けなかったら既に停滞してしまっていなければならないものだったのだ。それで私は、五里霧中のままに150ポンド以上の負債を契約してしまった。そして私がこの返済しなければならぬ負債だが、一体どうしたら返せるというのか。両会の寄付は合計してもこの四分の一に満たないのである」

この次に起きた問題が、工程管理の問題である。ホイットフィールドら同志連が、受託者に委任などしていたら受託者たちの意に沿わぬ説教をするとウェスレーが建物から締め出されるだろう、などと理由を挙げ、彼本人が管理するのでなければ関与も献金もしないと告げてきたのだ。このため彼は信託証書を取り消し、管理全体を手中に収めることになった。こういった経緯を経て事業経営・工程管理をせざるをえなくなったウェスレーが記したのが、次の言である。

---

<sup>20</sup> Journal 2: 194-198

「金銭についてはまさにだが、私には持ち合わせがなかったし、それを工面するなんらの人間的見込みも得られる可能性がなかった。しかし私は『地とそれに満ちるものとは主のもの』であると知っていたので、御名において疑いなく着手したのであった。」

金銭という現世的な物と、それをめぐる具体的営為（事業や工程の管理）に、ウェスレーがそこに神慮があろうと述べて自ら携わる姿がこの記述にはある。このような姿は初期ウェスレーには見られなかったものだ。結局この集会所は事業継続が成ったわけで、その迷いなき着手が悪く報いられなかったとは想像される。さらに次の話から、より一步進んだウェスレーの認識が看取できる<sup>21</sup>。1742年8月前半の逸話だが、ロンドン・メソジスト会最初の本部「ファウンダー」の建設にいささか関係しており、前段の話と通ずるところがある。

「日曜日、8日。……この晩私は、信仰を業によって見せていなかった者幾名かを、やむなく信徒の間から決別させた。その一人サミュエル・プリッグは深く気を損ない、多言を尽くし激しく恨み辛みを述べ、突然去って行った。翌朝、彼が私を呼び起こして言うには、弟も私も福音を説いてなどいないし、福音が言わんとしていることも分かっていない、という。私は尋ねた。『では、我々が何を説いているというのです？』彼は言った。『異教の道德ですよ。タリィの『義務について』<sup>22</sup>です。それ以上の何かではありません。だから僕はご両人と手を切ります。あなた方が近いうちにどうなるか、今に分

---

<sup>21</sup> Journal 3: 39-40

<sup>22</sup> 原文は Tully's *Offices*。古代ローマのマルクス・トゥッリウス・キケローの *De officiis* だろう。100 ポンドの抛出といい、キケローを引き合いに出せることといい、このプリッグは世間では富者・識者に数えられ、しかも会にそれなりの献身・度量を見せた人と思われる。山口徳夫氏の大業たる日誌邦訳版にはここに誤訳があり（『標準ウェスレー日記』第二巻 323 頁）、恨み辛みを述べるといった行状を、プリッグが日常的に他会員に行なっていた（他人の気を損ない暴言を繰り返していた）ように訳している。だが粗暴なならず者を追い出したというようなニュアンスの話では決してないと察せられる。彼については前掲拙稿の注 36 も参照。

かるでしょうよ、我々にはね。』」

「水曜日、11日。彼は私に100ポンドの支払を要求する請求書を送ってきた。一年前に、ファウンドリーの職人らに払うために彼が貸してくれた金だ。金曜日、朝八時に彼がやって来て、自分の金が欲しいのだ、ここにもう留まらないのだ、と述べた。私は彼に、借りて工面するよう努めるから、夜にまた来てほしい、と述べた。だが彼はそんなに長くはおれない、十二時きっかりには手に入ってなくてはならない、と言う。どこで工面すればよいか私には分からなかった。と、九時から十時の間にある人がやって来て、一年分の費用として100ポンドを献金してくれた。さらになんと、前に共に歩んだ人が二人、同じ申し出をしてくれたのだ。私はその一人が持ってきてくれた銀行証書を受け取った。かくて、神が万事の上にありますことを知ったのである！」

ウェスレーは、決裂した人間による金銭面からの圧力により、まさに「持ち合わせていなかったし、それを工面するなんらの人間的見込みも得られる可能性がなかった」苦境に置かれた。そこに見計らったような慈善的金銭による救いが入ったわけである。この時の彼には、さぞ金銭の中の神慮が実感されたであろう。

#### ・ウェスレーの金銭感覚の変化

この時期のウェスレーと金銭との関わりの特徴として、それまで扱ったこともない額、自分の個人的収入では到底まかない切れないような金額を扱い、会の事業を自ら手がけなくてはならなくなった、という点が挙げられる。まず、従来の彼の金銭感覚は、先の1734年の手紙に見て取れる。第九節である<sup>23</sup>。

「さらに一つ、心労からの自由というのはすこぶる有益な祝福です。そして私が今享受しているような自由を、どこで味わうことができましょう？この世の心配というようなことについて『聞いて』はおりますけれども、『感じて』はおりません。己の定まった日常のための収入は用意できております。せね

---

<sup>23</sup> Journal 2: 161

ばならぬことは、それをすべて家に持ち帰ることだけです。主な支出は食費ですし、これも何の心配もなくまかっています。雇っている使用人らには、四期制支払日に常に払われていますから、彼らの勘定にも何ら問題ありません。時に買う必要が出た物もただちに手に入れます。思考に労を費やさずにです。ですから、ここで私は『思い煩わなく』いられるのです。『ひたすら主に奉仕』できるのです。このことは、身も魂も聖くあるためになんと役立つことでしょうか。」

当時の彼には、1726年以來オックスフォード大学リンカーン・カレッジのフェロー手当 30 ポンドを基盤に、他に雑収入があった。先述の集会所建設で「思い違い」をする 1739 年以前、ウェスレーが扱っていた金額は平均して年 50 ポンド程度である。この金額で彼は自らの必要を満たし、そして近隣の貧困家庭に施し、その子供に教育を施したり、刑務所の囚人のケアを行なったりしていた。だが 1739 年からは扱う金額が 100 ポンドを超え、第一回のメソジスト会年會が行われて会の基礎作りが一段落する 1744 年までは、年平均で 350 ポンドほどを扱っている（『使用法』の段でスミスが同説教の成立年代とした年でもある）。この扱う金額という表現だが、収入が増えたわけではなく借金・献金・募金为主であって、彼が出納を把握・認識していた金額の総量、とでも言うべき数だ<sup>24</sup>。つまり、宗教会の始動に伴って、ウェスレーの金銭への関係・接触は数字にして平均で七倍、ことによるとそれ以上の増大を見せているのである<sup>25</sup>。

彼の主観的表現を使うならば、「この世の心配からの、思い煩いなき自由」から「一体どうすれば返済できるのか分からない負債、対処のための人間的見込

---

<sup>24</sup> 日記・手紙・説教その他の史料に明証がある記述をローガルが集成した情報を元に、額が分かっているもののみを足して概数として提示している。Samuel J. Rogal, *The Financial Aspects of John Wesley's British Methodism (1720-1791)*, pp. 61-64, (Edwin Mellen Press, 2002). 額が分かっていないもの、またウェスレーが書き残していないものを考えると（日誌からも多岐に渡る出納が伺える）、これらの数字には「少なくとも」と接頭辞を入れるべきではある。だが、本論での相対的小大関係の検討に問題を起すものではないだろう。

<sup>25</sup> 用途は考慮にない。「ウェスレーという個人の生活的必要を満たした上での余剰」を観点に入れば、七倍では済むまい。

みが皆無」への変化が起きている。この大変化の上での、神慮への信頼・帰依と結果的な成功という体験が、彼に「この世の財・金銭の背後にある神」という心証を醸成し、財への蔑視を撤回させしめ、善が実現されるための優れた道具、という積極的肯定の立場に誘ったのではないか。

### ・慈善「事業」の発見

成功体験は以降も続く。南西部ブリストルのニュールーム館、南東部ロンドンのファウンドリー館に続き、北部のニューカースル・アポン・タインに造られたメソジスト会第三の拠点「オーファン・ハウス」についても同様の話が見られる。1742年12月3日の記事でウェスレーはこう述懐する<sup>26</sup>。

「計画しているような建物は700ポンド以下では完成できないだろうと見積もられたので、多くの人が決して完工しないだろうと断言した。他の人は、私が生きている間には屋根がつくのを見ることはできまいと言う。私は違う考えを持っていた。これは神のために始めたことなのだから、かの方が完遂のために必要なものを与えて下さるであろうことは疑いない。」

着工時、彼には16ポンドしかなかったが、結局、「ウェスレーが困っているらしき夢を見たので礼拝所を建てるために役立ててくれ」と友人のクエイカーが100ポンドを送ってきたり、大陸のハレ大学のフランケ教授のような人から寄付が集まるなどして無事完工した。神の道具、信仰の道具としての金銭という心証をさらに重ねただろうに違いないが、この寄付者の一人フランケ教授の事業が彼の活動変化の契機として重要である。

フランケ教授はハレ敬虔派の指導者アウグスト・ヘルマン・フランケの息子で、事業を継いだ人物である。教授にウェスレーが会ったのは、彼がモラヴィア派の影響を強く受けていた1738年後半、ドイツに同派本拠を訪れる旅の最中であった。往路をハレに寄った際には教授の不在で面会は果たせなかったが(復路で面会した)、この時彼はフランケの事業「孤児の家(オーファン・ハウス)」

---

<sup>26</sup> Journal 3: 56

を視察している。1738年7月26日のことだ<sup>27</sup>。

「諸門を固めるプロシア王の偉丈夫らが、裏門へ回れ、いや表門へ回れと我々を門から門へと二時間近くも右往左往させた。その時私はフランケ教授に短信を送ろうと思いついた。その名が高価な香油にもまこと等しき、かのアウグスト・ヘルマン・フランケの、ご子息である。おお、彼がキリストに倣ったように私も彼に倣い、『真理を明らかにし、神の御前で自分自身をすべての人の良心に推薦』できるようになりますよう！」

「彼は市内にいなかった。だが我々は遂に『孤児の家』に入ることを許された。ここは、現代でもなお『信じる者には、どんなことでもできる』ことの驚くべき明証である。今ここには土台となる大きな財源があるが、その他にも印刷所、書籍販売、あらゆる種の薬類を揃えた薬剤局からもたらされる、絶えざる収入がある。この建物は奥から正面両翼まで、150ヤードはあったろうと思う。子供達のための宿舎、食堂に礼拝堂、そこからつながったおよその分室、これらはよくよく便利なように工夫されており、極めて清潔で、かつて見たことがないほどだ。聞かされたところでは、650の子供達がここで何から何まで養われており、憶え違いでなければ3000人が教育を受けていたとのことだ。まったくもって、神がこの場に成されたこの偉大な事柄について、これほどのものとしては我々も父の世代も知らなかったのである！」

カーノックの同記事への註釈が伝えるフランケの逸話は、ウェスレーの大きな感銘に本論の中でさらなる深みを与えてくれる。

「反対者達がこの館はあまりにも大き過ぎ、実際建ったとしてもとても維持できまいと主張した時、フランケはこう答えた。『適切な仕方での仕事を調整していくためにはどのくらいの大きさの建物を必要とするか、私が一番よく分かっている。それにこれは分かってもらいたいのだが、神がひとたび

---

<sup>27</sup> Journal 2: 16-17

この館を建てておしまいになった後にも、かの方はこれまでと同じように、この中に住むだろう貧しき者を養うのに、十分な富とお力とをお持ち続けるであろう。』彼はこの事業を7フローリンすなわち4ターレル16グロッシェン、つまり13.5マルク／シリングとともに始めたのであった。」

ウェスレーの時代、20シリングが1ポンドに相当する。つまり13.5シリングと言えば1ポンドにも満たない。時代は数十年程度、場所もいささか隔たっているが、まだいわゆる産業革命にも突入していない時期でもあり、物価水準に大差はない。この逸話を彼が聞いていたならば、16ポンド持ってオーファン・ハウス館に着工し、「これは神のために始めたことなのだから、かの方が完遂のために必要なものを与えて下さるであろう」と述べた時、ハレのオーファン・ハウスの存在に大いに勇気づけられていたろう。

カーノックは同じ註釈で、「これがウェスレーやホイットフィールドの『孤児の家』の起源である。我々はまた、19世紀を通じたイギリスの様々な諸教会の孤児救済事業のほとんどを、同じ淵源に辿ることができる」と述べているが、この事業とウェスレーの従来の慈善活動との違いは明白である。彼がオックスフォードやアメリカで行なっていた近隣の貧困家庭のケア、貧困子女への教育、囚人訪問等は、どれも個人レベルの行為、個人がいわば手弁当で行なう範囲の行ないであった（孤立無援で行なっていたと述べているわけではない。ホイットフィールドら少数の同志とともに行なっていたことではある）。この活動は、ジェレミー・テイラーの主張する「聖なる生活」の影響下に、「初代教会の生き方に倣って具体的生活を魂の救済の追求の場にする」という経緯で始まったことである。だから、自身の生活規模に応じた範囲になるのは当然ではあった。だが、ドイツからの帰国以降のウェスレーは、会を通じてそれを遥かに超える規模の事業に進むのである。

#### ・メソジスト会の慈善事業組織化

それを象徴する事例を次に取り上げる。1741年4月の後半から5月前半にかけての挿話であり、当時ウェスレーと、ホイットフィールドらオックスフォード以来の仲間の一部やモラヴィア派といった盟友との亀裂が深まっていた。

1738 年から彼らとの協力下に徐々に築いてきた諸会とそれをまとめる連合会 (United Societies)<sup>28</sup>、会員の輪の再構築に彼は追われた。4月の21日に弟チャールズに送った手紙に彼の認識が表れている (当時、会内では彼ら兄弟の決別すら噂されていたし、この手紙にもその影が表れている)<sup>29</sup>。

「班 (bands) と会 (society) が私の第一の関心事です。諸班は浄められます (The bands are purged)。会は浄めを進めつつあります (the society is purging)。そして我らは、この行ないの内に御手の存在を常に感じているのです。」

浄めを進めつつあるとは、(パージ **purge** に肅正という訳例があるように) 綱紀を肅正していたということである。この上に、先述のプリッグら「信仰を業によって見せていなかった者」のような、行ないに問題があると見做した会員を除名・追放するといった動きがある。だがなにも、もっぱら会員整理という意味合いというわけではない。この時期の彼は一般に、会の組織化と監督の手を広げていたのである。そして同じ手紙で、彼は自らの慈善活動について次のように語っている。

「私は、この地の病人を見舞う規則的方法に落ち着いています。八人から十人がこの行ないに従事することを申し出てくれていますが、彼らは常勤として専念する (have full employment) ことになりそうです。というのは、病にかかる人が日に日に増えているのです。」

この発言は、まず彼がオックスフォード時代と同様に定式化された方法的生活を営んでいること、それへの自発的同調者が現れたことを示す。これら同調者の成り行きは、生活の延長上での各個人の自発的営為が職業的なものに変化しつつある可能性、さらに言えば会として職を生み出しつつある可能性を示唆し

---

<sup>28</sup> これがウェスレーのメソジスト会となる。

<sup>29</sup> Journal 2: 448-449

ている。この記述からでは未だ個人活動を抜け出たとは確言し難いが、翌5月の7日の記事に、彼がさらに踏み込んだ形跡が見つかる<sup>30</sup>。

「私は連合会に思い出させた。我々の兄弟姉妹の多くが必要量の食物にありつけていないことを、多くが日常着に事欠いていることを。多くが咎なく仕事から締め出されていることを、多くが病にあり死を待っていることを。そしてまた、私は私としてできる限りのことをして、飢えた人に食べさせ、裸の人に服を着せ、貧しき人を雇い、病人だ人を見舞うよう必死で取り組んできたが、私の手持ちの内では既にやり切っていること、しかしながらこれだけでは前述のことどもになお十分でないことを、連合会に気付かせた。それ故にと、私と心を同じくする者みなに、以下のことを強く求めた。

1. 最も必要としている人々の間に分配されるべく、各自分け与えられる着物を持ち寄ること
2. 貧者と病人を救うために、週毎に1ペニーか、あるいは与えられるもの何らかを提供すること

私は彼らに、己の計画を語った。差し当たっては、職から締め出されかつ職を望む女性みなを、裁縫の仕事で雇うこと。そしてまた、これらの雇用には働きに応じた一般的賃金をまず与え、そして、彼女らの必要に応じて加算してやること。これらの案件を調査し、また病人を見舞い必要なものを支給させるために、十二人の人間を任命すること。これら十二人各人は、担当地区内の病人全員を一日おきに見舞うべきこと、そして火曜の夜に会合してそれぞれなしたことの報告を行ない、以降何ができるか協議すべきことを、である。」

ウェスレーはここに至って、個人（あるいは少数の積極的活動者の集まり）としての活動が限界に達しているという認識の下で、会による組織的な慈善事業の運営を開始した。それまでの個人としての活動、個人として可能な範囲からの、大きな飛躍であった。

---

<sup>30</sup> Journal 2: 453-454

## VI. 結び

以上、本論ではウェスレーの経済的な倫理、その中でもこの世の財への見方（Ⅱ章第③論点）と、その背景となる社会的活動とが、初期から中期にかけて変化する様を検討した。以下に考察を概括する。

ウェスレーは1738年にアメリカから帰国し、同志らと教区教会外の宗教会を形成し始めた。モラヴィア派視察のためドイツに赴いて後、彼は初の野外説教、初の集会所建設など行ない、以降も継続的に宗教会活動を活発化し、会の組織化も促進した。この過程で彼は、従来の人生では考えられなかったような額の金銭、一個人ウェスレーでは責任を負えぬ規模の金銭を取り扱うようになり、また同様に個人の活動の域を越えた規模の世俗的事業（慈善目的）を運営するようになっていった。この過程を通じ、金銭の背後にある神慮、金銭を使用する世俗的営為・事業についての神慮や神意的規範という認識がウェスレーに強く促され、もって③金銭観における逆転的变化を成さしめた——このように考えることができる。

このような変化に応じ、神意に適わぬ金銭の使用法という発想も発達したと見られ、先述の富者との対決姿勢と合わせて④の奢侈非難、富者非難を促進したとも考えられよう。そういった他の論点や他の時期の仔細については、稿を改め、またいづこかで述べることにしたい。

（東京大学大学院人文社会系研究科博士課程）